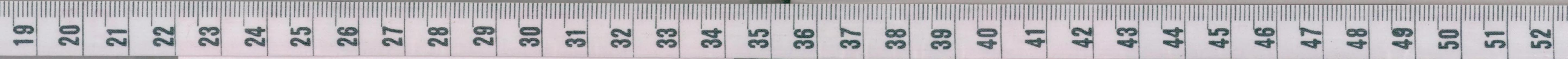
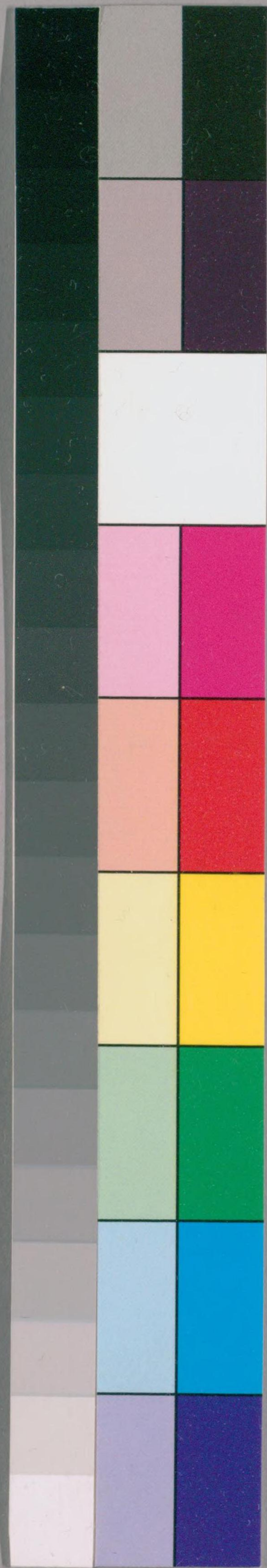


863  
103

白達摩

天  
一  
章



国立国会図書館 タイトル『白達摩』 請求記号 863-103

ガラス使用



863-103

天  
明  
三  
十  
年  
刊



白達摩見風追善集

序

風逸迹



山にありてはたつて動れ海のやうにうらむ  
 心平らあり物いそ見西に替り流るる  
 うむあつたつとや白を伴ふむとさう  
 を白待して海一字の傷をぬきしを  
 むらあつたつと見風を呼ぶ易の能くは  
 流りよれくれをまの冷多あなうり  
 入あつたつたの先小路をこころと  
 下

下





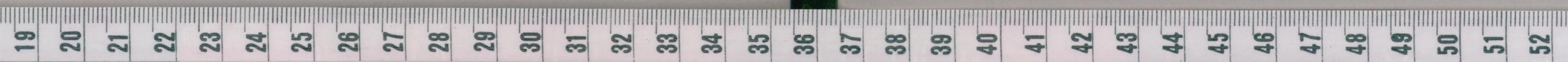




病中の記

まづこのころ一昨日朝日また見ゆ  
りりしうらやましいひめくまの  
まれのめくまのめくまのめくまの  
ふちうしあつてあつてあつてあつて  
やん袖さうり後足のあまほりあまほり  
さつたさつたさつたさつたさつた  
半解くまのりりりりりりりりりり  
盃蘭をさすのさつたさつたさつたさつた

古きながさつて海多あつて  
さつたさつたさつたさつたさつた  
減茶さつたさつたさつたさつた  
破さつたさつたさつたさつたさつた  
まの人の人をまの人の人を  
おのまの  
かしほさつたさつたさつたさつた  
お後あつてあつてあつてあつて





日か絶つて候へ病つてつらうとて

去りのや煙の中れ氣は所

きの病乃いとらされ床よりつらう枕もむ

はくく容顔をうりかのよき疾變うとて

人への應對の惑もあつりしうと昨日の不念

のきん海むわつらん医療をとめて觀念の

瞬時力があつらへその中いたたのこがくれん

えはららふいけふ歌ぞく眼の中漏るて

ふりしと水をもひとつてぬ唇をくことりし

一はあことさうく唯加流のこよふを授て

桜の葉何もあつたさあつらう

は昨日のかつらに睡むるを起として候へ

此の疾のされうれ門人夜族懸法とも

かひあしあハやとよまふ人こまつとて死

くあつて細なうつらうひも西を

よまき傷の煙絶けつらうとて揚ちて候へ

懸へいふとあつた折見風生煙絶法を

つらしてさあつた文とて代の長短を編み



たはしとぬぼの回りのりぬぼとまゝのりぬぼ  
はしとぬぼのりぬぼのりぬぼのりぬぼ  
わつとぬぼのりぬぼのりぬぼのりぬぼ  
白牡丹の瞳とまゝのりぬぼのりぬぼ  
泣とぬぼのりぬぼのりぬぼのりぬぼ  
端の生とぬぼのりぬぼのりぬぼ  
壱をぬぼのりぬぼのりぬぼのりぬぼ

しとぬぼのりぬぼのりぬぼのりぬぼ  
白蓮広堂

風逸



身ふりしとぬぼのりぬぼ  
はふちぬぼのりぬぼのりぬぼ  
おしとぬぼのりぬぼのりぬぼ  
しとぬぼのりぬぼのりぬぼ  
是ぬぼのりぬぼのりぬぼ  
ぬぼのりぬぼのりぬぼのりぬぼ

右  
冷泉為恭卿

五





四水打画



此風狭子 非牛能人  
淫怪々々 俚語其親  
無明狂者護之



足風りもこころ

尖と替をさうに

促りきし

ちりりり

今見ゆも

涼しうあやう

右画像の撰并ニ後方  
菅原直躬君



新あよきを接して

かきつらふ年二一本の白りり

湖右舎

左木

皆人のあつては濁る清き水

可者

各手白

昔あつておちと芥子の花や散り

観之

ふねむ麻子やまのたつたれ

如丸

花ちりて雪をうらうし止り子

双魚

たけしむきあはれ花や鳴る鳥

凡唱

経あやまひあつての音のな

八鬼

素横や梅の泣れ山あつて

女

心

経あやまひあつての音のな

の

中いもはるる梅の別れ

杜仙

梅あつてはるる梅の別れ

傍

中台

まふ月あつてはるる梅の別れ

孤雲

まふ月あつてはるる梅の別れ

志保

せめてしとち花あつてはるる梅

借老軒

柁

洞を合へて枯るる梅

傍

鬼



師のまへ杖もひきしとて蒸すの如  
 多かりし心もしるのあはなる星  
 法にゆきつらき花のかしこ  
 かたしきものいし河もよわゆる  
 茶売んるも泪のこまの如  
 あつちや人志のまうて岡たも  
 物てもきい取しと相もも  
 友信やちりり花の政かあし  
 遠くけし侍もかき小川

二白  
 糸柳  
 白陀  
 一北  
 宇友  
 梅村  
 几石  
 松本  
 善舟

さらさらや空のうへに代りて舞ふ  
 昔みもりの斬きひしきまじし  
 かりんちや泪をいづく白の如  
 何りんちも昔懐かしくなるの如  
 顔と参り画像を遊政を低て妙をを  
 月とあつて涙正ををいづく  
 情あつては昔きりりりし花  
 情もいづくしりりり月あつて如  
 茶売んるも泪のこまをいづく

笠塚  
 一観  
 文界  
 白川  
 北中  
 兎花  
 高山  
 太田  
 晴声



依もくちつぬささの柱あり角 を以 青阜

よむつれ花よつた大印月 を以 青阜

ちれいしきとていし を以 楚原

先世の爲多うつとつらそをむく地して  
とく走りつこふそを美さるのそとふあり

うひよれ今そあはるを滅せらるの悪極とてめ  
いしそ

かあしひさき入かひそや合衣 能世河系 左汀

さそ一しひさき 四下 都香

墳のあつらひに伝やとあつらひ  
あつらひけつれえまつし

洞りらるにふをくし 今溪 見指

洞花をかく誰うき 子浦 有恒

皆向くその衣 今ハ 孤船

凡のたよりむるにきさるりて

なめさしめき又の重き日 羽勝 指月

除わつぬ先の波 ミカイ 可由

空舟に云のま 穴あ 壺吹

ふささしむる風原に生涯をやとむ  
そら美さるの侍のそとあつらひ

名をさすけ 越中守 栢茂

候つさぬ 加納 魯鳳



初七日追善俳諧

小白川社中

はる陽をやまのりも既一七日

若三

いさげうとくく城壁の傍

凡逸

はくくとるる山かよもたもろそ

左本

煙もゆるるややくらうり

見那

よ他の海よひのりのみそふれ

而山

虫這かゆる秋の聲

可有

その中をさるりし秋のそれ

凡鳴

流のきこい磯礫小栗梅

文界

何とゆつりよは房もよこ日土

如丸

新柳をうらふんし若成り

孤雲

たりのちぬあまの松の塚ゆれ

八冠

そふらるるおれ中乃節きこ

以名

流の上をながれし人の味

志梁

ちゆりあふもあふるあれ果

楚後

村島ぬをやまもあふるあもあ

杜仙

神門の外に掃除せんせぬ

浄声

月も今ひく月花よふりれて

帆指

+



昔のあつた田を耕てある  
 はとと蝶の行ふ川白川  
 庵のりれい痛るまの飲る  
 ちのきりもあふふゆ振てる  
 ちのりつとらつた梅系松系  
 ちのりれれぬのまじれちをわく  
 ちのの養つして子履持しり  
 ちのくくとみまじわ 晩セ畑  
 ちのまをちちりりまをた高し

白川 逸 三 那 木 有 山 界 崎

ちのくくとみまじわ  
 白髪二人の年をかろく  
 ちのりつとらつた梅系松系  
 ちのりれれぬのまじれちをわく  
 ちのの養つして子履持しり  
 ちのくくとみまじわ 晩セ畑  
 ちのまをちちりりまをた高し  
 ちのりつとらつた梅系松系  
 ちのりれれぬのまじれちをわく  
 ちのの養つして子履持しり  
 ちのくくとみまじわ

雲 丸 水 免 陵 梁 声 仙 川

十一









かまふ園つらんこりもつらふまふ人の  
 つらふそのまをゆるさるるなり  
 およおぬし寄松祝とふ歌とほるん  
 うををえぬのみまといそよ入よまおらゆ  
 吹つこふうぢふおぬれ歌んそ  
 中ふさうゆるねのまのま

右  
 倉橋有儀朝臣

海のこらに能遊のまきもあふん  
 二つちたりのハ名を名客のまもさう  
 情さうし花と流るやうま  
 是うらに流るあまう人なるを  
 橋のまはけその凡のワうん  
 扇ふて入るもあまのまの係  
 子あをるるまをそのま橋のま  
 名情さの流るまも橋のま  
 物たりぬれまをまのま  
 うまうぬまをまのま

凡穴  
 一素  
 可左若  
 不有  
 素秋  
 川舟  
 斗南

三



花をてけらの葉の志けりよ  
 かしらんすまのつてりり  
 名所あるあやのをたきりれ  
 暮の泣くしをたふりふり  
 涼しさをあをき候子向をわ  
 さんあつしをいぬうれ時を  
 ことひのゆいさひしをちのき  
 来る人あしむのきりし  
 うれしきしをたきりしを子親

鳥夕  
 左柳  
 波声  
 孫道  
 之巴  
 一郎  
 赤凡  
 石蒙  
 何艸

花をてけらの葉の志けりよ  
 かしらんすまのつてりり  
 名所あるあやのをたきりれ  
 暮の泣くしをたふりふり  
 涼しさをあをき候子向をわ  
 さんあつしをいぬうれ時を  
 ことひのゆいさひしをちのき  
 来る人あしむのきりし  
 うれしきしをたきりしを子親

桂支  
 如由  
 希水  
 松江  
 毒涼  
 長枝  
 可ト  
 里石  
 魚木

古





情む花波北より入衣、  
きさくくよ花の傍よ小畑か、  
まのこり月や燈しとまのま、  
そと清くあらぬおを衣し、  
まなく花をのまふあふまをま、  
本とくすん草取しとつれは、  
ふみゆましうれ西のそしゆれ、  
卯むのよ向うこのまうま、  
嘉々とうのまろ花もや時を、

長夕  
魚一

茂見

甲斐

鳥太

芦扇

襖子

枝水

友人

又衣まうはましの白き一  
信 春務

先生みかうれて

うまさうをえ押し人の命か  
倉見 重陵

い〜ゆもくとねのままよま  
可大

まのまよしと経あつれは  
何程

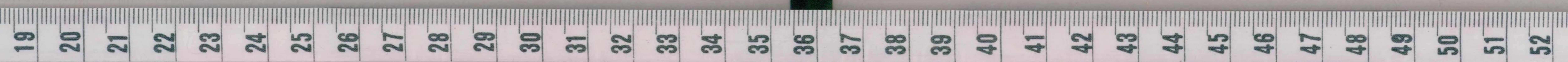
蜂ま塚と経もあもま  
昔仇

おほけとのれま〜鏡やか〜身は  
枝雪

此のゆをよのまけまのま  
鉅歌

笑まう〜の向卯ら〜百ね  
地鴨

十五









衣衣つらとむしむ見えし  
 又来りてくよと無垢の衣衣  
 新新やほほの垢の垢は  
 吹くやけいけ壺の花や  
 せこそ吹のこいこい子  
 吹てりしもの名や  
 あしやをさのて時  
 残るよのよの山  
 月入るるりや花  
 万枝  
 洞峯  
 周景  
 芦汀  
 巴柳  
 風吹  
 凡静  
 梅枝  
 善川

何見てもあつらふ  
 空も花も花の  
 居士も花も花の  
 家の月入るるり  
 このよやけいけ壺  
 袖の吹くはけいけ壺  
 吹ゆるやにけいけ壺  
 願わくはけいけ壺  
 伴のりしやのそく  
 見里  
 歌者  
 本帝  
 不賢  
 文例  
 志見  
 見明  
 祝系  
 可吹

十七



今唯海をよのこすかきしん、何音 芥枝

名かくてこふふ将を境りふ、八音 三坊

先つくして拂ふはせや法の内、夕浪

中使ぬきまふやかきと舞一と、新中今石動 左温

縁ぬきの花よりぬみかきと、鳥来

花婿ふよむ力あしるもの由、山更

鏡上のころあまのこかきし時を、素石

きりし海をの垢をくら入衣、牛睡

あふらふもかきしぬ昔がひや、吐雲

きりぬきのけぬや古きく、二及

しるしもあけしれぬか、盛盛

あれた人のこゝろのこゝろをき、新川

早いこゝろのこゝろを時を、信 元龜

あつりしとちよのこをぬき、伏草

常盤のなをきふしなむ山か、文龜

一白をともあふのこ

時よ日ふり時の子や白か子孫、峰柳

石ふき名いあつくと昔のこむ、福光 文龜

六



名をうらをひらきてはし子親、大門梅凡

登りよりの宮よりのえはに増牛、うらな芦花

多摩小倉白をすく塚のたか、苗加賢里

耳折ては花や咲のちりきん、ハクニミナト湖光

あつ草の孫もかきあしと庭るま、二日町傍魚宮雲

まき梅よあしりし花の白ひら、加納泗水

くちやまのあまこいぬ所の縁をゆぬ縁を抜くであうそのまを流をよよのワ

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

かへとる履隻足くあうりりり、福所故郷

十九







草花のさきとあしうなをき

涼風の止く香煙の舞うみ

花の露あけりさき芥子の畑は

くはゆいてる合と畑やみくみ

足利家の幸一丸をゆめて一日月照唐土  
ついで七郎の画像と言花をゆめて

さきとあしうのあしれや文衣

庭子持他法とあしうと御衣

その中よゆれてあしうと杖さき

綱りともあしうりりかきと杖

一東

左右

麦杜

琴水

純樞

中書

龜水

麦崎

一後ゆいて花いびしそきを衣

かき杖は涼めとえきとつりれり

花いさのそあつそきを夕さき

牡丹ちりしそきをの露の白ひき

さきとあしうと杖とあしうと衣

師の靴はなやあしうと夕さき

と一人のそきもほきの花う露

桜の木のそきもあしうとあしう

かあれきしゆりあしうとあしう

晩翠

瑞玉

杜若

可石

女  
寸人

子好

玉霞

李經

免置

廿一









おなほらききとふりくまらりき  
カキ

都山  
おなほらききとふりくまらりき

始水  
おなほらききとふりくまらりき

素王  
おなほらききとふりくまらりき

以文  
おなほらききとふりくまらりき

羊田  
おなほらききとふりくまらりき

而后  
おなほらききとふりくまらりき

喜習  
おなほらききとふりくまらりき

おなほらききとふりくまらりき

おなほらききとふりくまらりき  
妍叱

おなほらききとふりくまらりき  
不肯

おなほらききとふりくまらりき  
垢端

おなほらききとふりくまらりき  
垢端

おなほらききとふりくまらりき  
垢端

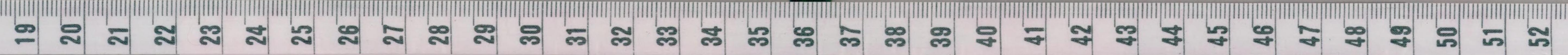
おなほらききとふりくまらりき  
垢端

おなほらききとふりくまらりき  
垢端

おなほらききとふりくまらりき  
垢端

おなほらききとふりくまらりき  
垢端

世三









花さるのまはぬふりてはるしり、  
正度 六念

血さるる絶えぬふりてはるしり、  
浦上 七念

琴さるる絶えぬふりてはるしり、  
六念

毛路の林さるる絶えぬふりてはるしり、  
海文

じあしたたはるる絶えぬふりてはるしり、  
カマヤ柳舎

かきさるる絶えぬふりてはるしり、  
後川

月花のさるる絶えぬふりてはるしり、  
重信

りさるる絶えぬふりてはるしり、  
休之坊

あさるる絶えぬふりてはるしり、  
松吉

公海後正等の分り向花のゆりてはるしり、  
今一そらふりてはるしり

さあ白あさるる絶えぬふりてはるしり、  
ノトキは 義涼

四くさるる絶えぬふりてはるしり、  
折修 花伝

かのりさるる絶えぬふりてはるしり、  
呂陽

早のれさるる絶えぬふりてはるしり、  
多明

名のまはるる絶えぬふりてはるしり、  
越井

あさるる絶えぬふりてはるしり、  
比奈

牡丹花のゆりてはるしり、  
十六

そき魂をさるる絶えぬふりてはるしり、  
正院 浅木

五



こころをいづるはとよまのたふさしん 舞白 段白

思ひ出—おりのしをこころ子親 子烟 赤也

又とらぬ花のちぬやこころとつ カ、カルカ、 浪花

あれ海不深の—あつ—水あふ 太田 梅風

旅人のちか—をり—閑石を 旅中植生 花ト

涼れ—はきや—たあひく—た— トナリ 葉隠

あつ—さひ—も—あ—の—あ— 行旅 楓

—ら—ま—の—あ— 行旅 花

—れ—や— 行旅 花

よれなまや中ふかよえぬあつと都の

は甲のしき—あ—ひ— 京南を居

ぬせのう—あ— 京南を居

花も—あ— 京南を居

こせり— 京南を居

あ— 京南を居

あ— 京南を居

あ— 京南を居

あ— 京南を居

廿六

女 花見

二返

何誌

破衣

かし

軍更

行旅

花

楓

葉隠

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花



うまかしくも扇子のねを丁なりけ  
子親との音一耳おれり  
くくゆてあゝおむのまき佛  
除脱て夕粧るおろ佛  
替し人も子を好きうたをけり  
まゆいゝおかけと名おろ  
そよもきのつるねを啼りまらり  
見送るもまゆゆの涙もほろけり  
糸のゆかりや志のか人あき  
善紅  
仙々  
和吹  
巨塔  
九慈  
重看  
如白  
毛太  
善井雪行舎  
望太

はるかなるはらうらなをてね  
いふお情もておむりれ夕鳥  
はまゆもみさきりおれを  
ぬくはけり花ゆりまゆゆのま  
月花よ凝る体うらまゆ  
まゆまゆぬりよの表や  
月小なるをぬりてりや  
それゆもまゆりたほり  
な花持りこのまゆり  
板ヤニキ  
如紅  
九赤  
若あ  
今井  
坂園  
あか  
え丸  
百之  
之巻  
可  
三  
可  
其









又月を人とかきお園行神工面を合てよう  
R千と勢をささめ友うしと世海に独のる  
わろしり今や古人の教入りつる  
あれたれや泪干かしてさう衣 式部 柳儿

体よたのこあさこのまをさあさう情むつこい  
けさぬり凡種まうりり 佐友 桃島

せりりしきさ一梳のけさあさ  
け別と啼くくくのりり子、 文志 柳枝

きりしれ名のこゆるや花の縁、 淳血

ゆちれあれたぬこちりや芥子の毛 弄声

あゆえそまははりりさうれ 奥州仙臺 旭扇

甘園の香やささるるくちてれさし 南部 淳血

又静香の又味の香化や蛇の凡 シモツギ 尺丈

世蘇もがあさういと桂工うんといらさ戸の 江戸 飛風

はあえさう一廣塚の産や様のお矢 於田坊

左さを挽ううの人のちりこに  
又凡を人けせをこりぬしはくやあつそ  
ゆえんゆらさ付やさなこらも 北五 花阿





は二十余年めかして終のわらわれて  
月花のたよりをききしと老人多きあり  
しつらりよとあがきし

卯丁や御所のふもとに路り 京 藤原

しつらりよとあがきし 巴陵

やうしつらりよとあがきし 丹波 山

しつらりよとあがきし 紀伊 山 巴邑

花の多きしつらりよとあがきし 伊豆 山 巴邑

花の多きしつらりよとあがきし 尾張 山 巴邑

花の多きしつらりよとあがきし 美濃 山 巴邑

ふきしつらりよとあがきし 大坂 止る

はつらりよとあがきし 大和 止る

はつらりよとあがきし 河内 止る

はつらりよとあがきし 丹波 止る

はつらりよとあがきし 紀伊 止る

はつらりよとあがきし 伊豆 止る

はつらりよとあがきし 尾張 止る

はつらりよとあがきし 美濃 止る

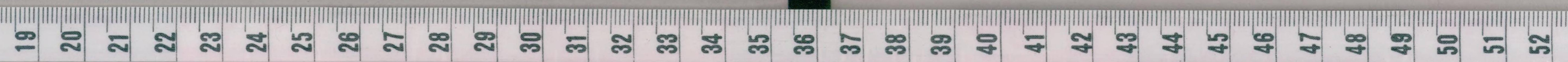
はつらりよとあがきし 三 止る





又凡世に能くその仙として身を修むる者  
 年ありしよりそのやまを去るとあるを以て  
 生傍やまのやまにちあれたるは 仙山  
 かりひよや 経行能きしとありて  
豊は杵築 仙山  
漢は三玄 楚辭  
 亦もむのまごこ日ありしとありて  
女 歌章  
 是月のおうりしりれちるもく  
奥ははげ 雨角  
 け月の氷やゆりゆりまをゆきも  
 そのゆりゆりゆりまの香をゆきも  
貞徳 百巻坊  
 焼くしておくりし月の香のみ向  
三河志保 梨道  
 花さして今ささる梅のよ ちと

のちれくふある愚痴園へめくぬる後よ  
 月よりしるべきは凡所と決しぬゆりゆり  
 傍りや ちとささる梅のよ ちと  
長江 昔屋  
 ちとささる梅のよ ちとささる梅のよ  
お田 天谷孤  
 我はれくぬるもしちとささる梅のよ  
天任ち 梅歌  
 ちとささる梅のよ ちとささる梅のよ  
早坂 芝舟  
 ちとささる梅のよ ちとささる梅のよ  
佐布 有恒  
 ちとささる梅のよ ちとささる梅のよ  
向笠 天谷孤  
 ちとささる梅のよ ちとささる梅のよ  
三





履をきく袖ひききりてや子母丸  
はらへてんや母の嬰粟の縁  
着袴のき向や母ふり人こそ  
着あはれもよ人あはれを芥子坊  
血を吐ひけりあはれむらさき  
子向ふり母のきあはれ白ひら  
別れ今もこそあはれそりね給ふ  
後あはれもあはれあはれしあはれ  
生れあはれ佛ふあはれあはれし  
、向笠、竹雅、治一、補石、全名、母之、城臣、北推、希由、藤之

又凡そのをきききききききき  
ゆくりの人のよりとて  
淋しきあはれ花あはれあはれ  
子のあはれあはれあはれあはれ  
そあはれのあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
、長号、古声、京、甫尺、文柱

懐旧

あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
、孤舟、三三





しつゝの度は読みかゝるるく  
又其人花那ふれり思ふも

た夢あこし麻のよきしと

下田君

そのゆり小唐のお終やまのし

年月を待つてしつげ

先生を待つてしつげ

桜のよきゆりしつげ

徳別石部山信

貞旭

湖右舎

昔人の名を收價と君俊不定人子と思ふ是所  
有まき人の意門の風骨を慕ひ一向に道ふ  
れに陰徳成りし諸邦の門人多く病に犯さる  
れしと句評上信事述(誠)に之をり人を服  
せりしと風骨と仰れしに三時の病友今  
は信入平門のよきまに堂まのしつげと  
思師の徳寸方を述而已

湖右舎

在木

三十三





消

863  
103

14148

書林

京三條通御幸町西口入

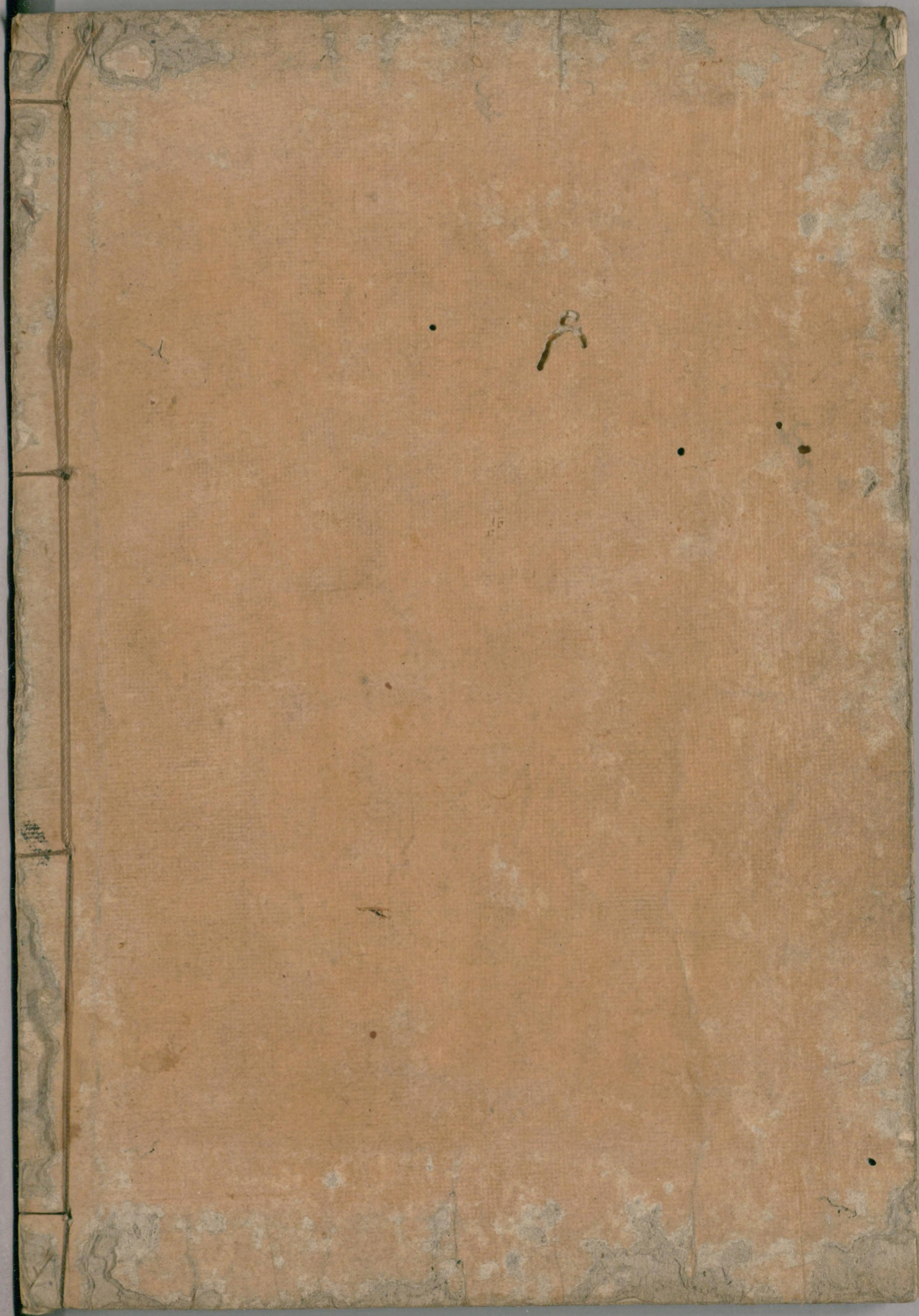
菊舎太兵衛梓

*[Faint handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side]*

*[Faint handwritten text on the right side of the page]*







国立国会図書館 タイトル『白達摩』 請求記号 863-103

ガラス使用